

平成29年11月1日

松阪市議会
山本芳敬議長

議員 海住恒幸

研修報告

平成29年10月21日（土曜日）～23日（月曜日）の3日間、名古屋市の名城大学ナゴヤドーム前キャンパスを中心に開かれた民間まちづくり実践セミナー名古屋セミナー（国立政策研究大学院大学主催、名城大学後援）に参加しましたので報告書を作成いたしました。

研修先

民間まちづくり実践セミナー・名古屋セミナー
（国立政策研究大学院大学主催、名城大学後援）

日時

平成29年10月21日（土）午後1時から午後6時30分

22日（日）午前9時30分～午後6時

23日（月）午前9時30分～午後5時

※なお、3日間とも日帰り参加を予定しておりましたが、22日は午後より台風21号の接近で近畿日本鉄道名古屋線が不通となったため、同日は、急きょ、名古屋市内に宿泊しました。23日は午前中、警報が解除されていなかったため、午前9時30分からの参加は任意となり、オフィシャルには午後1時からのスタートとなりましたが、わたしは午前9時30分からの参加としました。

会場 ①名城大学ナゴヤドーム前キャンパス
西館2階レセプションホール(名古屋市東区)
②大曾根商店街「OZモール」(名古屋市北区)

●はじめに

「民間まちづくり・名古屋セミナー2017」は、国土交通省の助成により、国立政策研究大学院大学（本部・東京）の主催、名城大学(名古屋市)の後援で、京都や名古屋、東京に1か所ずつ会場を用意して、それぞれの地域の特徴ある課題を設定して開講したプログラムの一つです。名古屋セミナーは、名城大学ナゴヤドーム前キャンパスを会場に、台風21号の接近する中の3日間開催された。



名城大学ナゴヤドーム前キャンパスは、文化系学部を中心に今年4月全面オープンしたばかりの真新しい施設です。3日間を通し、レセプションホールと呼ばれる部屋を拠点会場として使わせていただき、グループワーク中心に、レクチャー、実地調査、討議、まとめ、プレゼン（まちづくり提案）までを行った。

今回、まちづくりを考えるテーマの対象となった大曽根商店街（名古屋市北区）まで徒歩で10分ほどのところに位置します。大曽根商店街は、かつては大須、円頓寺とともに名古屋三大アーケードに数えられた場所である。

大曽根商店街は、30年ほど前に、現存する商店街の中で実施される土地区画整理事業を契機とした市開発を行い商店街の近代化を図った。その結果、「名古屋都市景観賞」を受賞するなど一時は全国から視察が相次ぐなど注目を集めました。通りは広く、店舗も新しくなったものの、大須のアーケードのような活気あふれる面影はすっかり無くなり、人通りはほとんどない閑散とした状態となっているのが現状である。

セミナーには、大学や大学院で建築学を学ぶ学生や名鉄不動産事業部の社員、名古屋市役所の職員など12人が参加。3日間を通し、名城大学と名古屋学院大学、政策研究大学院大学の教授や民間の専門家（コンサルタント、建築家）が2～3人ずつ配置されたグループ（計4）に分かれ、グループ討議を進めるワークが中心だった。途中随所に、名城大学を初めとする名古屋の私大の教授や、東京のコンサルタント、大阪の建築家など計7人の短い講演（1人30分ほど）をはさんで進行しました。また、初日は、台風接近に伴う雨の中でしたが、地元商店街理事長の案内で参加者全員が研究対象となる商店街ウォッチングを済ませている。

●まち歩き・現地調査（タウンウォッチング）



大曾根は、尾張名古屋の城下の北の玄関にあたり、街道の終結点であるとともに分岐点であった。街道が栄えた江戸時代には街道の交わりに人の往来が活発だったはずだが、戦後高度経済成長の時代以降は、6差路ある複雑な交差点で交通渋滞が日常化するなど、交通障害解消が名古屋市を挙げての懸案だったにちがいない。

わたしは、たまたま、JR大曾根駅西側で大曾根商店街周辺の土地区画整理と商店街の近代化が進んでいた1990年代前半のころ、読売新聞記者として大曾根の北に隣接する春日井市を担当エリアとして持っていたため、大曾根を通過する国道19号を通り、春日井市と名古屋市中心部にある本社を行き来していた。当時、日常的に道路の改良工事が行われると同時に、古くて狭い、にぎわいのある通りがクルマ中心の大きな道路に変貌していく姿を目の当たりにし、衝撃を受けたものだ。



現在の太曾根商店街は「OZ モール」と呼ばれ、「普段着の街」から「おでかけの街」へというコンセプトのもとに、近代化を図ったのだという。

わたしが知っているのは1994～1995年当時の太曾根で、20数年前のことである。当時、再開発はかなり進んでおり、大きな交差点の一隅に、「すずらん通り」と書かれた小さなアーチの下にはクルマも自転車も歩行者も混在する街だけが残っていた。

「すずらん通り」には銭湯も芝居小屋も、どて煮を食べさせる小さな食堂などがあり、しばしばその街に立ち寄っていたものだが、いまはその面影はない。通りが巨大化し、「すずらん通り」の風情をのみこんでしまった。「普段着の街」から「おでかけの街」に変わってしまった象徴的な出来事のようなのだ。

太曾根の都市再開発は、大変長い歴史があるようで、古くは戦災復興に始まる土地区画整理に連動して現在があるということである。今回の調査対象ではない JR 太曾根駅の東側の別の街区には、ナゴヤドームや名城大学ナゴヤドーム前キャンパス、イオン、三菱電機工場などが立地しているのは、おそらく、その成果によるものであろう。しかし、駅西側の商店街のほうに、ナゴヤドームに野球観戦に来た人たちや、名城大学の学生たちが訪れることはなく、多くの税金を中心に投じた巨大投資に見合わない街並みが閑散とし、30年を経て空き店舗も目立ち始めている。当然、担い手たちの高齢化の波も押し寄せている。

街並みウォッチングの最中、和菓子屋さんを見つけたので、その店に昔から伝わる草餅を買った。かたちが変わっているので女将に尋ねたら、名古屋独特なのだという。夜、家に帰って食べてみたが、とても柔らかく、天然素材のヨモギの香りとともに味わった。このような餅が残る街には、わたしは好感を持つ。なぜなら、よき伝統が残っているということだから。



同行した大学生たちが立ち寄っていく店があったので一緒に入ってみたらフルーツサンド発祥のサンドイッチ屋さんということだった。けっこう有名で春日井市など各地からも買いに来る人は多いと学生たちが話していた。サンドイッチ屋さんの建物は鉛筆のようなタテに細長いものでユニークだった。あと、「OZ モール」と書かれたアーチの脇あったガラス張りのコーヒー豆さんと、歩道に売り物の花がせり出していた花屋さんのあたりには魅



力を感じた。

全体的には1980年代におしゃれな街並みとして形成された街区であっても、バブルの時代特有のデザインに違和感を覚える。この近代化の行われた街に飽きるのは、一つの時代に一齐に形成されるたけであらうか。「松坂」のように戦国武将が形成した街も、ヨーロッパ中世の街並みも、同じ時代に一齐に形成されるが、長い時代の積み重ねのうえに、個々の建物ごとと少しずつ変化していくため、もともとの風情はとどめながらも適度な新しさと斬新さ、人の生活感とがほどよくブレンドされることによって、飽きの来ない街並みを感じることができるのではないだろうか。

そのような意味においては、一斉に更新期が訪れてしまった30年という時期は、後継者がなく、街の元気をうしないかけたタイミングである場合、一番過酷である。ただ、こういう開き直りも可能ではないか。

すなわち、わたしたちが訪れることのあるヨーロッパやアメリカのにぎわいがあり、おしゃれを感じる商店街を歩きながら、一つひとつの建物に着目して、もちろん、古く味わい深い煉瓦造りの建物もあれば、まったくそうでないものもある。だけれども、不思議と街の風景がうまく溶け込み、訪れた人々の気持ちに「ステキである」と感じさせるものがある。それは何を原因とするか。一つひとつの商店が、魅力的な店づくりをしていれば、街は輝く。街区全体に巨大都市投資をすれば街が良くなるという発想は捨てなければならない。

そういった意味では、「OZ モール」は、すでに十分に立派なのである。

一つひとつの商店にいかにもう一度、魂を吹き込むかで、街は再生されてくる。わたしは、松阪市の中心商店街の中で空き店舗補助を活用して個々に工夫している個性的な店舗の魅力にあらためて気づいた。

●講演1(10月21日午後) 「時代と建築」(高井宏之・名城大学建築学科教授)

研究テーマが、「役割を終えた建物の変遷について」という高井教授による導入の講義。報告が前後するが、セミナー初日の開講直後、まち歩き・現地調査(タウンウォッチング)に先だって行われた。時の変遷とともに業態が成り立ちにくくなった施設の再利用について、建築の適合性を話された。例としては公的宿泊施設を有料老人ホームや教育・研修施設など、地域ニーズに合わせて用途を変更したものを紹介された。

●講演2(10月21日午後) 「元三大アーケード商店街 大須・円頓寺・大曽根」(井澤知且・名古屋学院大学現代社会学部教授)

大曽根は交通の要衝だったが、行政区の分断の歴史があり、コミュニティとしてまとまりにくい。大須や円頓寺には「よそ者・若者」の知恵でその人らが活躍し、情報発信が活発だ。円頓寺では、空き店舗を地域サービスにつなげるような利用のされ方もある。

●レクチャー1(10月22日午前) 「メインストリートプログラムのすすめ」(内藤英治・一般社団法人日本メインストリートセンター副代表)

大曽根の「OZ モール」は、アメリカ・ミネソタ州のミネアポリスにある蛇行する道「ニコレットモール」を真似たが、30年を経て、シャッター街に近づいている。商店街の寿命は20年しかない。新しいものを採り入れた商店街も20年で陳腐化するの、20年に一度の再投資が必要。ただし、魅力を失ったままで再投資しても効果はない。



もともと、その街にあった価値（優れた店・あとを継ぎたくなる店・すぐに投資が回収できる店）に気づき、ちょっと何かをしていけば復活は可能だ。そのために、活気があったころのまちなかがシャッターストリートになっている現状の中に、パブリックマインドを結集したい場所を見つけ、パブリックマインドを持った人を集め、商店街、自治会とは異なる第三の組織としてエリアマネジメント組織を作ることが必要だ。

シアトル郊外のコロンビア・シティは、スターバックスが一軒もないさびれた街で、商店街を廃止する前の最後の取り組みで、スターバックスを誘致することにした。スタバに来てもらう条件は、毎日、店を満杯にすることだったという。それで商店街の人たちは街の役員会を毎日スタバで開くことにした。それがやがて、商店街復活につながった。

エリアでまちづくりを考えたようだ。

●レクチャー2（10月22日午前） 「みっけ！ このはな」（西山広志 建築事務所 No Architect）

西山氏は、大阪市此花（このはな）区の梅香・四貫島エリアの空き家や空き店舗を次々と甦らせている建築家。基本は「猫の目線と鳥の目線」といい、ちょっとずつ手を入れ、全体の価値を上げている。元タバコ店の古い空き家を「モトタバコヤ」とネーミングし、元の店の雰囲気を残しつつもおしゃれな場所として街歩きツアーの受け付け機能を持たせ

るなど、エリア全体にユニークな空き家・空き店舗活用を手掛けている。「今まで流れてきた時間や、人の生活の痕跡を街の風景として尊重したい」という西山氏に共感する。



●レクチャー3（10月22日午前） 「まちの中心を、民間発意で、再生（活性化）させるための活動組織づくりの基本と進め方」（中山高樹・一般社団法人日本メインストリートセンター理事）

「まちの再生は、ストリートが基本」という考え方を示されている。エリアを小さくして取り組むということで、その基本をストリートであると言われる。街の特徴を発見し、それを生かす工夫をした提案が必要だ。まち歩きして地域課題を発見する際、その街の強み、弱みだけでなく、そのどちらも見るのが大切だと講師の中山氏は言う。中山氏は、このあとのワークショップでは、わたしたちのグループ担当でいらしたので、口を酸っぱく、そのことを言われた。

●ワークショップ（22日午前11時～午後6時、23日午前午前9時30分～正午）

22日は台風21号の接近で風雨が強まる中の開催となった。わたしが属したグループは、中山高樹・一般社団法人日本メインストリートセンター理事のファシリテーションで進行。大曽根商店街をエリアとして、どうあるかを提案していくプロジェクトづくりに取り組んだ。グループの中でわたしが分担したのは、もともと街道の分岐点として栄えた大曽根が、クルマの通過車両には利便性の高い交差点が整ったが、商店街は出入り困難な

区域となり、商店街が孤立し、人の流れが途切れたと現状を分析。最寄りのJR大曽根駅、名鉄瀬戸線の大曽根駅からも道路で切り離され、歩行者にとっても街が分断されているのが現状だが、それにもかかわらず、商店街の中で取り壊された建物の跡地に分譲マンションが建設中であるなど、周囲のマンション需要は高い。それなら、他から訪れる商店街ではなく、地元に住むことになったマンション住民がクルマに乗って、よそへ買い物に行かなくても済むような街として再生すべきだとして、商店街をクルマ社会の中のオアシスとなるよう、OZモール=オアシスマールとして、「よそいき」ではなく、「普段着」の街へに原点回帰を求める提案をまとめた。





●まちづくり発表会（23日午後1時～午後4時）

大曽根商店街振興組合の理事長ら地元のお2人をゲストに招き、各グループの発表を行った。



以上